

加賀象嵌

加賀象嵌（かがぞうがん）は、加賀藩（現在の石川県）で発達した装飾的な金工技法である。特に江戸時代（1603－1867）に加賀で生産された鎧、刀装具、馬具に関連する工芸品である。加賀象嵌は彫金技法のひとつであり、彫金は 1955 年に重要無形文化財に指定された。

一般的に象嵌は、金銀などの柔らかい金属を、硬い地金に埋め込むことによって形成される。加賀象嵌は平象嵌とも呼ばれ、地金に金属板や針金で文様を埋め込み、地金と同じ高さになるように作られる技法である。加賀象嵌の特徴は、地金の留め方にある。職人が地金に斜めに切り込みを入れ、開口部よりも底部の方が広くなるようにする。このくぼみに象嵌を打ち込み、表面を滑らかにすると、象嵌が広がり、地金のはみ出しで固定される。

加賀象嵌のデザインは多色であることが多く、これは象嵌の部分と別の金属を重ね合わせる「重ね象嵌」という手法で表現される。はんだや接着剤では接合が難しいが、加賀象嵌は接着力が強いので可能だ。また、伝統的な銅合金を弱酸性の溶液で処理し、保護用の酸化皮膜やカラフルな緑青（ろくしょう）を作る「色金」という技法で、珍しい色を作ることもできる。

日本では古墳時代（250 年頃-552 年頃）の象嵌刀が発見されているが、その技法が確立されたのは、金工家・後藤祐乗（1440-1512）の登場からである。後藤は日本の彫金の父と考えられ、多くの装飾的な金属加工技術を開発し、その子孫がさらに進化させ、普及させた。

石川県に象嵌技法がもたらされたのは、17 世紀初頭、加賀藩の時代である。藩主の前田利長（1562-1614）は、祐乗の曾孫である後藤徳乗（1550-1631）を招き、鎧や馬具の装飾を地元の金工に指導させたのである。加賀藩は、前田家と後藤家の間で数世紀にわたって金工の名声を高め、特に象嵌細工の鎧（あぶみ）や実用に耐える甲冑（かっちゅう）に定評があった。

1868 年の明治維新で武士がいなくなると、武士に刀や鎧を納めることを生業としていた金工職人たちは、生計の主な源を失った。しかし、貿易や国際交流を支援する政府の政策により、金属工芸品の海外市場が生まれ、一部の金属工芸家は純粋な芸術活動へと軸足を移すことができた。しかし、20 世紀前半の戦争による金属不足、後半の技術革新による伝統工芸への関心の低下などにより、再び危機的な状況に陥った。

しかし、石川県の金工家たちは、加賀象嵌の技と知識を新しい世代に伝え、その技を現代的な美意識に応用するための革新的な方法を開発しているのである。2004 年、中川衛（1947-）は、

その彫金技術が評価され、重要無形文化財保持者に認定された。石川県立美術館は、中川の作品 1 点と、中川の師である彫金家・高橋介州（1905-2004）の作品 7 点を所蔵している。